大阪市立大学医学部附属病院

市大病院情報誌

そよ風

2018年3月
第31号

Smile! / Service! / Science! 笑顔の大学病院を目指しています

Contents

- 「ズキズキする頭痛と締め付けられる頭痛の違い」 ー頭痛専門医による外来のお知らせー
- プロジェクト「病院がプラネタリウム」
- がん患者さまのための地域包括ケアミーティングを開催して
- ～青森県三村知事が訪問されました～ 青森県と本院臨床研修医との意見交換
- 医学生の診療参加型臨床実習（クリニカル クラーク シップ）
- 乾癬のバイオ製剤治療について
- 院内イベント情報
- 認定看護師の活動について

診療科紹介　病理診断科・病理部

「ズキズキする頭痛と締め付けられる頭痛の違い」 ー頭痛専門医による外来のお知らせー

片頭痛（図１）は、若い女性に多い病気で、ズキズキとした拍動性の頭痛をきたし、右または左の「片側」に頭痛を起こすことが多いため、「片」頭痛と呼ばれます。吐き気を伴い、光、音、臭いに過敏になるため、静かな暗い部屋で頭痛がおさまるのを待つ必要があり、日常生活に大きな支障をきたします。「前兆」として頭痛発作の前に、視野の一部にキラキラして見えにくい部分が出ることがあります（閃輝暗点（せんきあんてん）：図２）。片頭痛には特効薬があり、通常の鎮痛薬が効かない場合でも劇的に頭痛が治ります。

（図１）片頭痛

（図３）緊張型頭痛

一方、同じ姿勢で長時間、机上の作業をしていると、肩こりと同時に締め付けられるような頭痛や頭重感が起きてくるのが緊張型頭痛（図３）です。この場合は片頭痛の特効薬は効果がなく、筋肉をほぐす体操やお薬、リラックス効果のある入浴などで症状を改善します。

（図２）閃輝暗転

また急激に頭をバットで殴られたような激痛がした場合には、くも膜下出血が疑われ、緊急の対応が必要です。

神経内科では、火曜日午前に頭痛専門医による外来を開設しています。慢性の頭痛でお困りの時や、たびたび仕事に差し支える頭痛発作がある場合には、ぜひご相談ください。

＊受診には紹介状が必要です。

（神経内科　伊藤義彰）

プロジェクト「病院がプラネタリウム」

「病気や障がい、生活環境などによって、ホンモノの星空を見られない人たちに、星空と宇宙を届ける・・・」当プロジェクトを企画した一般社団法人星つむぎの村代表、高橋真理子さんの言葉です。高橋さんは山梨県立科学館のプラネタリウムを担当していた2007年、山梨大学附属病院にてホームスターを使って投影以降、全国を回ってこの活動を続けてこられました。

エアードーム移動式プラネタリウム

当院では2014年から年に1回、高橋さんに来て頂き、小児の患者さまを対象にエアドーム移動式プラネタリウムによる投影を行っています。8階にある院内学級の部屋をお借りし、ドームを設置。中は結構広く、一度に20名程度入ることができ、親子でねころんで見ることもできます。上映は1回30分程度で、今夜大阪で見える星空・星座の話から始まり、あなたの生まれた日の星空は？　銀河系外宇宙空間に飛び出そう、そして再び地球へと高橋さんの暖かい語りで話が進みます。これを5、6回くり返します。昨年はNICU（新生児集中治療管理室）に投影機をもちこみ、天井に投影して赤ちゃんとお母さん、スタッフにも楽しんでもらうことができました。

今後は対象を病院全体に広げ、より多くの人にこの素晴らしい体験をして頂きたいと思っています。

（小児科　時政定雄）

がん患者さまのための
地域包括ケアミーティングを開催して

がん診療の概略をご説明

懇親会の様子

平成30年1月27日（土）午後3時半より午後4時半まで、小講義室１におきまして、「第1回がん患者さまのための地域包括ケアミーティング」を腫瘍外科学教室主催で開催させていただきました。

大学の近隣の開業医の先生方（阿倍野区、天王寺区、西成区、東住吉区、住吉区、浪速区、西区、住之江区）をお招きして、腫瘍外科学教室（附属病院　消化器外科・乳腺内分泌外科）におけるがん診療の概略について説明いたしました。目的は、大学病院と地域の先生との交流を深めることにより地域診療に貢献することです。

当日は、39名もの開業医の先生方にご参加いただきました。ミーティング後の懇親会では、多くの先生方の大学病院に対するお考えを拝聴いたしました。先生方からは、「大学病院に紹介しても紹介状の返事がない」「準緊急状態の紹介は可能か」等の厳しいご意見をいただき、改めて我々が報告不足であることを痛感いたしました。一方で、「各分野の抗がん剤治療や手術について教えてほしい」などのご要望も頂戴しました。

今回、当科としては初めての試みでありましたが、成功裏に終了いたしました。今後も、このようなミーティングを通して近隣の先生方との連携を深め、患者さまを御紹介いただき、大学病院におけるがん診療の進歩につなげたいと思います。

（腫瘍外科学　田中浩明）

～青森県三村知事が訪問されました～
青森県と本院臨床研修医との意見交換

青森県三村知事による挨拶

本院2年次の臨床研修医は、青森県内の病院で1か月間地域医療の研修を行うことができます。本研修は、平成19年度から始まり、今年度は32名が研修を行いました。今回の意見交換会では、青森県からは三村知事、山中健康福祉部医師確保対策監、小川良医育成支援特別顧問、また研修医の受入病院の病院長等も含め、総勢12名の方々にお集まりいただきました。

本院からは、平川病院長、平田副院長、安積本部長、首藤卒後臨床研修センター長、事務部門並びに今年度青森県地域医療研修に参加した研修医が参加しました。

意見交換会では、平川病院長、三村知事の挨拶の後、三村知事より、青森県の地域医療研修についてスライドを使ってご説明いただきました。その後、今回の地域研修で感じたことなど、研修医一人一人が発表しました。

研修医からは、「病でなく人を診るということを教わった」「人と人との関係性を築き、家族や生活環境など患者さまの背景を知った上で医療を行うことが重要であると感じた」など、活発な発表が行われました。また、首藤センター長からは、「青森の研修では、過疎地域での医療行為ということもあり、医師の仕事の重要性に気付かされる。地域の人々との交流を通じて各々が感じたことを忘れず今後も頑張ってほしい。」と激励の言葉がありました。

今回の研修に携わってくださった皆さま、
本当にありがとうございました。

三村知事は、一人一人の発表に強く頷き、時に優しい表情でお聞きになられ、「医師としての人生の中で、地域の現状を知り、そこで感じたことは大きな糧となる。互いに刺激を与え合えるよう、今後も多くの医師の方に青森に来てほしい。」とのお言葉をいただきました。

また研修医を受入いただいている病院の病院長の方々とも、風土や言葉の壁など、研修での厳しさや楽しさについて、様々な意見が交わされました。

本研修は来年度も30名近くの研修医が参加する予定をしております。若い医師が地域医療の現実を身を持って感じられる貴重な機会であり、医師の地域偏在問題や日本全体で良医を育成していく取り組みとして有益です。青森での研修が医師人生の糧となり、今後大きく活躍してくれることを期待しております。

医学生の診療参加型臨床実習（クリニカル クラーク シップ）

近年の医学教育は、知識を詰め込む知識偏重型教育から、医学生が主体となり患者さまとの関わり合いの中から学ぶ診療参加型の教育へと変貌しつつあります。診療参加型臨床実習（クリニカル クラーク シップ）では、学生が診療チームの一員に加わり、医師の監督下に問診、身体診察、現場での思考法、さらに医療人としての責任感を学びます。一度も患者さまに接したことがない医学生を医師として卒業させるわけにはいかず、知識・技能・態度の質保証が求められる時代となっています。

医師の監督下、問診を行います

学生と医師とでミーティング

これを受け、文部科学省は臨床実習実施のためのガイドラインを作成し、現場での実習を行うためには医学部国家試験に準拠した全国共通の知識を評価する試験と臨床能力試験の2つの試験に合格することを条件としました。合格すると、晴れてStudent Doctorの認定を受けて附属病院等での臨床実習が始まります。このような臨床実習は患者さまのご協力なしには行なえないものです。患者の皆さまにはこの臨床実習の趣旨をご理解いただき、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

（医学部教務委員会　豊田宏光）

乾癬のバイオ製剤治療について

乾癬（かんせん）は表皮がターゲットである炎症性角化症で、皮膚のターンオーバーが異常に高まる病気です。乾癬になると、皮膚が赤くなる（紅斑）、皮膚が盛り上がる（浸潤）、その表面を銀白色のかさぶた（鱗屑（りんせつ））が覆う、それがフケのように剥がれ落ちる（落屑（らくせつ））が起こります。その原因は完全には解明されていませんが、最近の研究では免疫機能の異常が関わっていることがわかってきました。

治療には、外用療法、光線療法、内服療法、バイオ製剤による注射療法があります。
バイオ製剤は、免疫細胞の情報伝達にかかわる「サイトカイン」の働きを抑え、皮膚のターンオーバーを調整します。日本では、乾癬に対して、2018 年 3 月現在 6 つの製剤が使用可能です。この治療は、皮疹が重症な患者さま、他の治療では十分な効果が得られない患者さま、乾癬性関節炎を合併している患者さまに対して、日本皮膚科学会が承認した施設でのみおこなうことができます。しかしバイオ製剤には副作用もあり、日本皮膚科学会では治療指針を定め、患者さまの安全性を確保したうえで、適切に使用するよう努めています。従来の治療法やバイオ製剤を含めた中から最適な治療を選べるよう、乾癬の症状で困っておられる方は、一度ご相談下さい。

（皮膚科）

治療前

治療後

院内イベント情報

「Artem ミュージック」による歌とピアノのコンサート

日時　平成30年4月5日(木)　15:00～16:00
場所　病院5階 講堂

「Magic Ring」によるワークショップ　乳癌パット作り

日時　平成30年4月26日(木)　13:00～15:00
場所　病院18階 第4会議室

ボランティアグループ「ブレンドエナジー クワイア」によるコンサート

日時　平成30年5月10日(木)　15:00～16:00
場所　病院5階 講堂

「はりねずみ」によるワークショップ　うちわ作り

日時　平成30年5月24日(木)　13:00～15:00
場所　病院18階 第4会議室

相愛大学による第68回院内コンサート

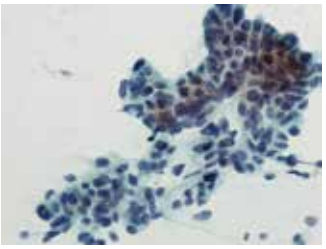
日時　平成30年6月　15:45～16:30
場所　病院5階 講堂
※開催日は未定です

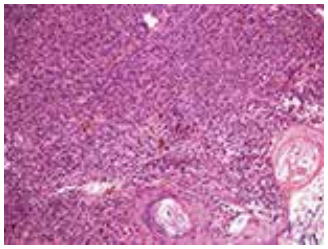
※日程及びイベント内容については変更する場合もございます。予めご了承のほどお願い申し上げます。

シリーズ 診療科紹介 病理診断科・病理部

“患者さまの安全を優先に精度の高い病理診断を担う”

現在、病理診断科には病理専門医が3名おり、解剖資格はもちろんのこと教育研修施設としての認定資格を有します。また、病理部として臨床検査技師が11名在籍しており、認定病理技師1名、細胞検査士8名、二級臨床検査士6名等、専門的な技術を証明する各種資格認定を取得しています。病理診断は治療確定の最終診断でもあり、患者さまの安全のための材料取違い事故を起こさないため、患者さま別の材料提出から標本作製までをバーコード認証や要所でのダブルチェックを駆使し、安全対策も講じています。さらには患者さまの尊い意志のもと、病理解剖により治療が如何に行われ、どのような原因で死を招いたかを明らかにし、医療に貢献しています。私たちは地域がん診療連携拠点病院、病院機能評価等の病院の質への貢献を行い、病理診断科・病理部として本年度ISO15189を取得いたしました。これからも患者さまのための医療に貢献する努力を怠ることなく、邁進してまいります。





シリーズ 第7回 ～認定看護師の活動について～

当院では、専門的な知識と視点を持つ認定看護師・専門看護師が協力しながら対応・活動しています。

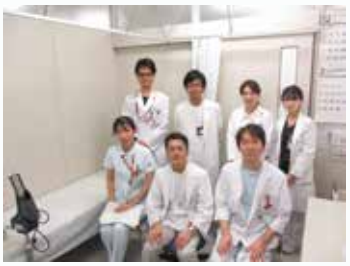
心不全は、減塩や水分制限、感染予防など、日常生活で多くの管理が必要となりますが、これらは心不全の悪化の予防に繋がります。認定看護師は、身体の状態を評価し、療養管理を継続するための専門的な援助を行う役割があります。患者さまがより良い生活を送ることができるよう、一緒に考えることを心がけ、外来診療時に体調を確認し、管理方法を検討しています。また、医師、薬剤師、理学療法士、栄養士と心不全教室を開催しています。様々な職種の方と連携して、心不全の患者さまをはじめ、ペースメーカーなど心臓の治療を受けられる患者さまの支援をしています。

慢性心不全看護認定看護師　阪口綾香

心血管疾患集中治療部

糖尿病は長い経過をたどる病気のため、患者さまの状態、知りたい情報は様々です。現在、認定看護師として以下の3つの専門外来に携わっています。①専門の医師とともにインスリンポンプ指導や最新の血糖持続モニタリング機器などを扱うiポンプCGM外来、②腎臓病・糖尿病専門医、管理栄養士とともに腎臓が心配な方のための腎症進行予防外来、③皮膚・排泄ケア認定看護師とともに糖尿病で足が気になる方のための糖尿病フットケア外来。気になる外来があれば、まずは当院の生活習慣病・糖尿病センターの主治医にご相談ください。

糖尿病看護認定看護師　江尻加奈子



i ポンプ CGM 外来チーム

認定看護師とは、公益社団法人日本看護協会の認定看護師認定審査に合格し、ある特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を有することが認められた者をいいます。
※公益社団法人日本看護協会ホームページから引用　http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn

発 行／大阪市立大学医学部附属病院　http://www.hosp.med.osaka-cu.ac.jp/
所 在 地：〒545-8586 大阪市阿倍野区旭町1丁目5番7号
電　　話：(06)6645－2121（代表）
初診受付時間：午前9時～午前10時30分
休　　診　日：土・日・祝日、12月29日～1月3日